表参道日記 171

慌ただしかった夏

文 伊藤公一
text by Kouichi Ito

プロフェッショナルな物書きであれば、到底許されない過ちであろうが、先月は体調不良や引っ越しなどに追われ、うっかり締め切り日を過ぎ、脱稿してしまった。

その間2カ月。世界中で予測不能な様々な出来事が発生した。

前日に列車を狙ったテロリズムが起き、安全な開催が危ぶまれたものの、厳重な警備のもと、セーヌ川をフル活用したパリ五輪開会式が催された。

ロンドン大会の開会式も見事であったが、ヨーロッパ人がすることは悔しいけど洒落ている。コロナ禍で配慮を重ねた東京大会を派手にやり直したい気分に襲われた。大阪万博に期待しよう。

そこで本番は、万が一の失策が無い限り、世界ランキングの順位に基づき、勝つべき人間が表彰台に登るわけだが、それにしても連日の日本人メダルラッシュには興奮させられた。ところが不思議なことに、期間中はテレビを見っぱなしで寝不足にまで陥っていたものの、数日が過ぎると、メダリストの競技レビューにもインタビューにも興味が無くなり、オリンピックは過去の話で、目前のプロ野球ペナントレースや高校野球観戦にスイッチが変わっている。

それにしても大谷翔平は凄い男だ。五輪期間中は鳴りを潜めていた打撃が、五輪終了を見計らったように炸裂し、再び注目の的となっている。

米国の大統領選も一気に様変わりした。演説中のトランプ前大統領が襲撃され負傷を追いながらも、果敢な姿勢に感動が集まったのも束の間、バイデン大統領が不出馬宣言し、ハリス副大統領が選手交代し、激しい舌戦が広がりつつある。

そして、他国につられたわけでは無いだろうが、我が国の現職・岸田総理大臣も総裁選への不出馬を宣言。現在、列島横断台風の合間を縫って、実に11人の立候補者が戦いの姿勢を明らかにしている事態だ。

実に目まぐるしい2カ月間であり、日米ともに結果は予測不能だが、当然の如く、日本の行方を誰が担うかの方が大切な事項である。

そこでスーパーチューズデーに始まり、長期に渡ってお祭りのように賑やかで派手なアメリカの大統領選に比べ、国民が直接関わることのない間接選挙戦の日本は地味で厳かだが、何故か安心感が得られる。

今後、ニュースにもならないであろうが、オリンピック直前で出場辞退に追い込まれた女子体操・宮田笙子選手が可哀そう過ぎる。

「お酒とタバコは二十歳になってから」は当然の規則だが、昔の大学生ははるかに緩やかだったものに思う。一般大学の運動部やサークルでも、新歓コンパが大人の階段だったと記憶している。

体育大学の女子大生の一服。実に豪快で格好良く思えるが、自分は不良老人であろうか。

Profile
1958年生まれ。伊藤病院3代目院長。
北里大学医学部卒業、東京女子医科大学大学院修了。医師になって以来、国内外にて一貫してバセドウ病、橋本病、甲状腺癌など甲状腺疾患に対する診療と研究にひたすら従事。
東京女子医大、筑波大大学院非常勤講師。日本医科大学、了徳寺大学客員教授。
日本内分泌外科学会、日本甲状腺外科学会理事。厚生労働省診断群分類調査研究班班長。
伊藤病院 http://www.ito-hospital.jp/
名古屋甲状腺診療所（名古屋分院）http://www.kojin-kai.jp/nagoya/
さっぽろ甲状腺診療所（札幌分院）http://www.kojin-kai.jp/sapporo/